



1994年箱根駅伝出場時
ゴールの瞬間
写真提供：『月刊 陸上競技』

FRONTIER

教育・研究の最前線

文武両道で箱根駅伝への「襷」をつなぐ

政策・メディア研究科 教授

蟹江憲史

慶應義塾が最後に箱根駅伝に出場したのは、1994年、私が競走部の4年生の時でした。70回記念大会で出場校数が増えたことで、なんとか出場ができませんでした。個人競技が中心の陸上競技の中で、数少ない団体種目の駅伝は、チームの結束を高め、卒業後に続く友情の礎をさらに強固にしてくれた素晴らしい出来事でした。

今年競走部は創部100周年を迎えました。100周年への準備、そして、100周年の先へと進むにあたっての取り組みの一つとして、OB・OG会では「箱根駅伝への復活」を目標に掲げました。94年当時も箱根駅伝出場は至難の業でしたが、それからさらに月日がたち、箱根駅伝の人氣も高まる中で、駅伝の商業化も進み、今では出場できるレベルもかなり高くなっています。そうした中、「慶應らしく」箱根駅伝出場を目指す取り組みを始めています。軸となるのは「文武両道」です。大学は教育研究機関であることから、まずは研究によって強化を目指します。そのため、私の所属するSFCの中に「ランニングデザイン・ラボ」という研究ラボを作りました。スポーツ医学的見

地からの身体開発、ケガをしない練習方法、チーム・ビルディングといった研究はもとより、ヘルスサイエンス、心理学、社会の持続可能性(SDGs)といった観点からの研究により、総合的に研究基盤を蓄積します。ラボでは、長距離ヘッドコーチを兼ねる保科光作特任講師を招聘し、強化の現場と研究を一体化しています。

慶應義塾にはスポーツ推薦も、強化選手への奨学金はありません。それらが「常識」となっている箱根駅伝の現状に一石を投じるべく、大学の原点に立ち返った選手勧誘を始めています。OB・OGも動員して高校の大会などへの視察を重ね、文武両道に呼応してくれる学生に積極的に受験を勧めます。現役学生もこれをできる限りサポートします。今後は一貫教育校との連携も強化していきたいと考えています。

箱根駅伝復活への挑戦は、村井純環境情報学部長(執筆当時)をはじめ、塾内外の多くの関係者の力で動き始めています。何年かののち、選手たちがその「襷」を箱根路につなげてくれるものと信じています。